様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　６ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２７５８

研究課題名（和文）再帰形式の文法化現象について―生成文法理論の観点から

研究課題名（英文）A Study of the Grammaticalization of Reflexive Forms from the Perspective of Generative Grammar

研究代表者
野口　徹（Noguchi, Tohru）

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：２０２７２６８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本語には多数の再帰形式が存在するが、それぞれが文法とどのように関連づけられるのか、従来明確にされていなかった。本研究では、「自身」と「自己」が統語的に述語を再帰化するのに対し、「我」や「身」のような和語は語彙的な仕組みを用いて述語を再帰化する形式であることを確認した。また、「自身」と「自体」は名詞句内の焦点として位置付けることができる。「自分」については、Nishigauchi (2014)の分析によれば、統語的な束縛を受ける意識主体照応形であることになる。以上のように、日本語の再帰形式を文法のモジュールに分散させて特徴付けることが可能であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
再帰形式を複数用いる言語は多数あるものの、日本語のように歴史的経緯により、和語と漢語のような語種に応じて再帰形式を使い分ける言語は稀である。再帰形式は束縛理論を中心として、文法理論の枠組みを考える上で長年にわたり重要な役割を果たしてきた。その一方で、日本語の多様な再帰形式の性質を包括的に捉える仕組みは十分に検討されてこなかった。本研究はこの検討課題について、一定の方向性を示した点で意義のあるものと言える。

研究成果の概要（英文）：There are many reflexive forms in Japanese, but it has not been clear so far how to capture them in grammatical theory. This research project has found that zisin and ziko reflexivize predicates syntactically, while ware and mi are part of reflexive predicates formed in the lexicon, and that zisin and zitai are some type of NP-internal focus particles. If we follow the proposal by Nishigauchi (2014), it is also possible to capture the logophoric property of zibun in syntactic terms of binding. Overall, it is now clear that a variety of reflexive forms in Japanese can be captured in a way that is related to each grammatical module.

研究分野：文法理論

キーワード：再帰形式　照応　文法化　意識主体性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
Givón (1971, 1979)以降、文法化現象は機能主義類型論の立場から行われることが多く、一部の研究を除き、通時的変化に対する記述的な説明が大半を占めていた。(Traugott and Heine 1991, Narrog and Heine 2011 などを参照。) 再帰形式の文法化については、Faltz (1977)により、再帰代名詞が身体表現や人称代名詞から生じ、述語との形態的融合を経て、中間態形式、語彙形式へ変化するという提案がなされ、その後の研究でも多数の言語について、その仮説が概ね支持されてきた (Kemmer 1993, König and Siemund 1999, König and Vezzosi 2009 など)。生成文法理論においては、Chomsky (1981)以降の束縛理論の展開を受け、諸言語に見られる再帰形式の成立要件に関する研究が進められていた。一方で、日本語のような多数の再帰形式を持つ言語については、「自分」や「自分自身」など一部の形式を扱う研究は多く見られるものの、「自己」「自体」「我」「身」といったその他の形式を含めた包括的な研究は行われて来なかった。

２．研究の目的
文法化現象の研究は、機能主義類型論の立場から行われることが多い。本研究では、主に英語と日本語の再帰形式の文法化現象に生成文法理論の視点を導入することにより、文法化現象の背後にある仕組みを明らかにし、説明的に妥当な照応理論を再構築することを目的とする。具体的には、Faltz (1977)以降支持されてきた歴史的変遷 (強調表現・代名詞・身体表現→再帰形式→中間態形式) がどの程度日本語について当てはまるのか明らかにすることにより、再帰形式の文法化に見られる一般性と個別言語における特殊性とを導きだす。また、記述的調査に基づき、妥当な照応理論が備えるべき要件を明確にする。日本語の再帰形式には、再帰代名詞「自分」、「自身」、「自ら」、「自己」、「己」、「我」、再帰接辞「自」、身体表現「身」、「心」といったさまざまな形式が存在し、複雑な体系を形成している。そのため、①文法化の視点から、このような体系が成立した経緯を調査し、説明的に妥当な照応理論の構築を試みる。②日本語の再帰形式は、和語と漢語に基づいた体系を形成しており、形式間に競合(competition)や阻止(blocking)といった関係が見られるのか、その際どのような条件が関わっているのか、一般言語理論との整合性の観点から調査する。

３．研究の方法
本研究では、主に英語と日本語の再帰形式を取り上げ、その成立要件を捉えうる照応理論を構築することを目的としている。従って、文法化現象の詳細な検討 (先行研究の検討、経験的基盤の整理) を基に理論的な考察を行う (理論的考察)。より具体的には、①文法化の一般的特性と理論的問題点の整理に基づき、②英語 (およびその他の言語) の再帰形式の文法化現象の特徴と問題点の整理、③日本語の再帰形式の文法化現象の特徴と問題点の整理、④照応理論の枠組みの検討、⑤再帰形式の文法化を捉えうる照応理論の構築、⑥検討課題の整理と将来展望の考察、という順に進める。

４．研究成果
(1)　日本語のように再帰形式を数多く持つ言語では、認可条件を明らかにすることは重要な課題である。本研究においては、まず「自」「自己」「自身」が SELF 形式として語彙的・統語的に認可されるのに対し、「自分」はその他の場合(elsewhere case)として認可されることを示した。これにより、「自分」の代理読みの解釈が可能であることが説明できる。また、概ねReuland (2011)が示した再帰形式の認可に対するモジュール性が妥当であることが示される。この点は、2017 年度所属大学における紀要論文 “Some Notes on Reflexivity in Japanese”で示した。
(2)　しかし、「自身」が SELF 形式として統語的な認可を受けると考えることで、新たな問題が生じる。英語などの SELF 形式が定形節の主語位置には生じない一方で、日本語の「自身」は定形節の主語位置に生じうる。この違いは英語の SELF の強調用法には代名詞形式を伴うが、日本語では「自身」のみに強調用法があることから説明できる。この点は、2018 年度所属大学における紀要論文 “Some Notes on Reflexive and Emphatic Forms in Japanese”で示した。
(3)　日本語の語彙的再帰表示には、「己」「自ら」などの和語によるものがあるが、その他の再帰表示との関係には阻止による効果が見られる。この点は、2017 年度の学会発表“How Is Reflexivity Licensed in Japanese?”において示した。
(4)　理論的には、日本語のような統語的接語を持たない言語では、再帰動詞が語彙的・統語的に生成されるという帰結をもたらし、概ねMarelj and Reuland (2016)が示した方向性と合致する。この点は、2017 年度の海外での学会発表２件、“Two Ways of Deriving Reflexive Verbs in Japanese”及び “Two Types of Reflexivization in Japanese”において示した。
(5)　日本語を含む数多くの言語において、複合再帰代名詞が SE+SELF の形式で表されるが、2つの形態素が統語的に異なる投射を形成する要素であるならば、一般的な統語的規則性から逸脱するものとなる。この点は、名詞句内に焦点を表す投射を存在することで説明できる。この点

は、2020 年度所属大学における紀要論文 “Some Notes on the Internal Structure of Complex Reflexives”で提案を示した。
(6) 数多くの言語において、再帰形式が局所的な領域で束縛されるのみならず、意識主体照応詞としても機能する点について、Charnavel (2019)はどちらも束縛の仕組みを使って説明できるという提案を行っている。日本語の非有性の再帰形式「それ自身」が免除照応形としての機能を持たないことは、概ね Charnavel の提案を支持するものである。この点は、2022 年度の所属大学における研究紀要 “Some Notes on the Distinction between Plain and Exempt Anaphora”において示した。
(7) その一方で、意識主体性と再帰性との関連については、日本語のような再帰形式を数多く持つ言語においてどのように文法上位置付けられるべきか、今後の検討課題となることを確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Tohru NOGUCHI	４．巻 18
２．論文標題 Some Notes on the Distinction between Plain and Exempt Anaphora	５．発行年 2022年
３．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	６．最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tohru NOGUCHI	４．巻 25
２．論文標題 Two Types of Reflexivization in Japanese	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics (online)	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Tohru NOGUCHI	４．巻 36
２．論文標題 Review of Daniel Harbour's (2016) Impossible Persons	５．発行年 2019年
３．雑誌名 English Linguistics	６．最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tohru NOGUCHI	４．巻 16
２．論文標題 Some Notes on the Internal Structure of Complex Reflexives	５．発行年 2020年
３．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	６．最初と最後の頁 105-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tohru NOGUCHI	4．巻 88
2．論文標題 How Is Reflexivity Licensed in Japanese?	5．発行年 2018年
3．雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	6．最初と最後の頁 409-415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tohru NOGUCHI	4．巻 14
2．論文標題 Some Notes on Reflexive and Emphatic Forms in Japanese	5．発行年 2018年
3．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	6．最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tohru NOGUCHI	4．巻 13
2．論文標題 Some Notes on Reflexivity in Japanese	5．発行年 2017年
3．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	6．最初と最後の頁 121-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Tohru NOGUCHI
2．発表標題 How Is Reflexivity Licensed in Japanese?
3．学会等名 The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics（国際学会）
4．発表年 2017年

１．発表者名 Tohru NOGUCHI
２．発表標題 Two Ways of Deriving Reflexive Verbs in Japanese
３．学会等名 2017 Linguistic Institute（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Tohru NOGUCHI
２．発表標題 Two Types of Reflexivization in Japanese
３．学会等名 The 25th Japanese Korean Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関